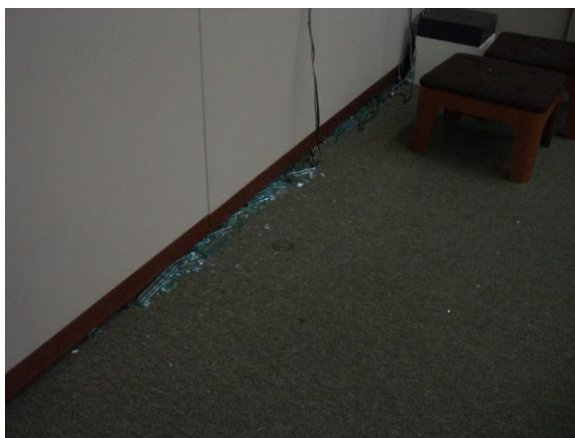


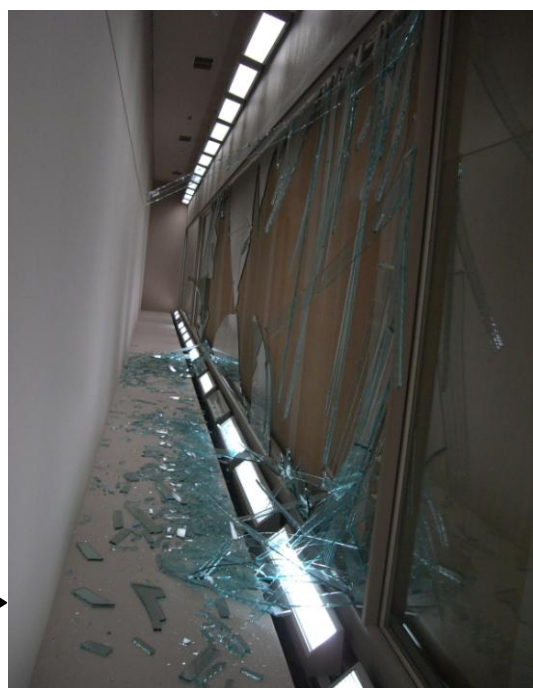
# 宮城県美術館の再開館に向けて

～被災箇所の修復と来館者の安全確保～



**写真1** 固定展示ケース前面に設置した可動壁の下から覗くガラスの破片

**写真2** 可動壁裏側:固定展示ケースガラスの破損状況(本館1・2階とも同じ部位での破損が確認された。)



## 1 地震当日の様子

東日本大震災発生当日(3月11日)は、平成23年1月15日(土)開幕の特別展「アートみやぎ 2011」が開催されていた。

館内には、緊急地震速報が流れ、間を置かず、激しい揺れが始まった。揺れが治まった直後には、地震を想定した防災訓練マニュアルに従い、展示室や県民ギャラリーの観覧者、創作室、図書室、レストラン等の利用者の安否確認を行うとともに、避難場所の中庭に来館者を避難誘導し、職員も集合した。(写真3)

来館者を含め、中庭に集合した避難者には人的被害は無かったが、地域一帯が停電し、館内各所に、転倒や落下物の散乱が確認されたことから、来館者には、ラジオからの情報と閉館を告げ、余震等に注意して帰宅するよう喚起した。

その後、自家発電や懐中電灯の明かりを頼りに、職員等が手分けして、展示室や収蔵庫内の作品や建物・施設等を点検し、被害状況の把握に努めた。



**写真3** 中庭への避難:余震が続き、座り込む来館者もいた。閉館を告げ、帰宅の途へ。津波被害を知る由もない。

## 2 翌日以降の対応

### (1) 作品の保全措置

学芸部職員総出により、展示作品の収蔵庫への撤収作業に取りかかった。一時は、停電でエレベーターが使えず、また、余震に脅えながらの作業となった。

数日後からは、作品の寄贈者や寄託者に対して、当館の被害状況等を報告する余裕もできてきた。

一方、4月7日夜の大きな余震では、本震の時に日本画を展示していた本館展示室の固定展示ケースガラスが割れ、破片は

展示室中央部まで飛んでおり、余震の怖さとともに、速やかな作品保全措置が功を奏したと実感させられた。

この惨状から、減災対策の一環として、固定展示ケースガラスには、飛散防止対策を施した合わせガラスを設置するなど、展示作品と観覧者の安全を確保する方法についても検討することとなった。

## (2) 被害の把握と対応の検討

翌日以降は、余震が続くなかでの後片付けや全国からの問い合わせに対応しながら、被害の全容把握と修復方法の検討などに追われた。

3月15日には、年度内の全事業中止の決定及び被災箇所の修復と施設の安全確認など観覧環境整備の時期を当面6月末とすることを決定し、休館に伴う対応についても館内協議している。

また、事業中止に伴う関係各位への連絡や協議、特別展中止と前売り券の払い戻し、県民ギャラリーや各種講座の申込者への連絡、館業務運営関係業者との協議等を行うことなども決定した。

なお、3月21日までは、夜間2名体制による24時間体制を組んで、これらに対応している。

## 3 被害状況の把握

この地震による被害状況(4月7日の余震も含む。)は、次のとおりです。

- ① 「アートみやぎ 2011」に展示中の粘土や素焼きの作品が一部落下・損傷した。
- ② 「アートみやぎ 2011」の映像作品用プロジェクターが落下・損傷、修復は不可能な状態であった。
- ③ 作品を展示していなかった展示室1及び3の「固定展示ケースガラス」が一部破損。(展示室1のガラスは、4月7日の余震でもさらに一部破損した。写真1, 2, 4)
- ④ 教育普及部前のテラス沈下と階段タイルの剥離(4月7日の余震で、さらに沈下が拡大した。写真5)
- ⑤ エントランス等の照明カバーの落下
- ⑥ 展示室内の天井ルーバーのズレ、ルー

バー留め具の落下

- ⑦ 本館エントランス及び記念館玄関外天井GRC板のズレ
- ⑧ 各展示室出入口の防火扉錠前破損
- ⑨ 記念館1階ロビー排煙口破損
- ⑩ 展示室、県民ギャラリーの可動壁のズレ
- ⑪ 建物周辺タイルの欠損、ひび割れ、段差・盛り上がり等の発生
- ⑫ 内壁のひび割れ、外壁の歪み
- ⑬ 備品関係
  - (ア) 創作室: マップケース転倒破損
  - (イ) 展示室: スポットライト落下(写真6)
  - (ウ) 管理部: テレビ落下破損
  - (エ) 荷解き倉庫: 図録保管用スチール棚の破損
  - (オ) 展示室4: 乾湿計破損



**写真4** 4月7日夜の余震で割れた本館1階展示室1の固定展示ケースガラス(鋭く尖った破片が6m先まで飛んでいた。)本震当時は、日本画を展示中。写真奥の本震による被害ガラスは撤去している。



**写真5** 教育普及部前テラスが約5cm沈下(4月7日の余震でさらに沈下)。「美術館探検」で多くの子どもたち(10歳未満)が訪れる箇所の一つとな





**写真6** 落下して破損、飛散したスポットライト(観覧者には当たらなかった。不幸中の幸いか。)

## 4 再開館にむけた取り組み

### (1) 美術館の姿勢

津波被害の深刻さに心を痛めながらも、「復興へがんばろう！」を合い言葉に、全庁が一丸となって、復旧・復興に取り組むこととなった。

当館としては、「美術館が開いている」という日常を取り戻すことで、被災者の心の支えになることを願い、一日でも早い開館を目指し、来館者の安全確保を最優先にした観覧環境の整備を前提に被災箇所の修復を進めることとした。

### (2) 部分開館に向けて

4月中旬には、応急復旧と施設の安全点検の結果を受けて、佐藤忠良記念館の観覧環境が確保できることから、本館の常設展示の代表的な所蔵品19点の展示を含めて、5月1日(日)から、佐藤忠良記念館は観覧料無料とすること、さらには、創作室1・2及び図書室の開館を決定した。

4月27日には、職員及び館運營業務関係者総がかりで開館前の総点検を行った。

また、佐藤忠良記念館は、3月30日に亡くなった当館名誉館長である佐藤忠良氏を追悼するコーナーも設けたところ、5月1日の開館と同時に多数の方が来館され、佐藤名誉館長の人望の厚さを物語っていた。

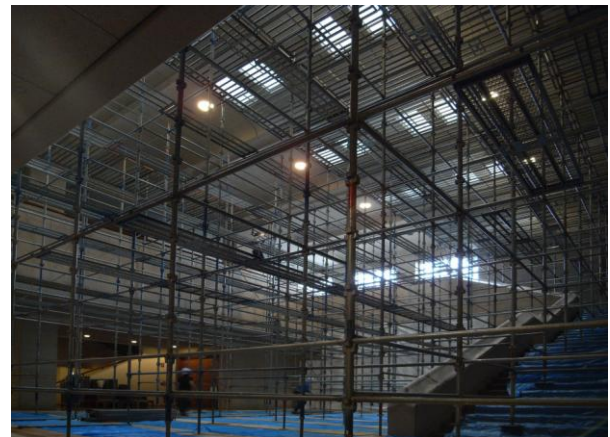
### (3) 全面開館に向けて

震災から3ヶ月が過ぎる6月中旬には、本館展示室やエントランスホールなどの照明器具の改修と天井の点検作業日程も固まり、6月末までには、本館の観覧環境を確保できる見通しが立った。

これを受けて、7月5日(火)から、レストランとコーヒーショップを除いた本館、県民ギャラリー、ミュージアムショップを開館することとし、6月30日には、職員総出による館内安全総点検を実施した。

注) レストランとコーヒーショップは、3月下旬で営業停止したいとの申出が震災前にあり、公募する予定でいたが、震災で日程がずれ、5月下旬公募開始、10月中旬開店に変更となった。

このため、5月中旬からレストランオープンまでの対応として、コーヒーショップの場所に、紙コップ提供タイプの自動販売機を設置した。



**写真7** エントランスホールの天井、天窓、照明器具点検のために組まれた足場。

## 5 再開館後の状況

### (1) 今後の被災箇所修復予定

来館者の安全確保を最優先にした観覧環境の確保を前提に修復を進めた結果、9月末現在では、「固定展示ケースガラス」「教育普及部前のテラス沈下と階段タイルの剥離」「本館エントランス及び記念館玄関外天井のズレ」「記念館1階ロビー排煙口」の修復を残すのみとなった。

これらについては、一部を除き、メンテナンス休館中の工事を予定している。特に、「固定展示ケースガラス」については、飛散防止対策を施した合わせガラスを設置して、展示作品と観覧者の安全を確保することとなった。

### (2) 再開館後の美術館

#### (ア) 展覧会の概要

本館再開に合わせ、小企画展では、「宮城の画家:大沼かねよ・二宮不二麿・

加藤正衛」を開催し、本県作家による「昭和の洋画史」を紹介した。

また、コレクション展示としては、本館・佐藤忠良記念館ともに、代表的な所蔵品を展示したほか、佐藤忠良記念館では、「追悼展示・佐藤忠良が遺したもの」を開催した。

8月からは、特集企画として、「宮城県美術館所蔵 絵本原画名品展」を開催し、当館の原画コレクションの真髄を紹介した。

平成23年度の特別展としては、第1弾の「フェルメールからのラブレター展」は10月27日から、第2弾は平成24年1月14日から「クレアとキャンディスキーの時代」を、平成23年度締めくくりとなる第3弾としては、3月17日からの「世界遺産ヴェネツィア展」が企画されている。

#### (イ) 東日本大震災被災地中学生招待事業

「フェルメールからのラブレター展」では、震災復興関連事業として、宮城県美術館協力会との共催で、4回に分けて、中学生を招待した。津波被害が特に大きく、交通手段の確保が困難と思われる気仙沼市、南三陸町、石巻市、東松島市内の中学校美術部に参加を呼びかけたところ、12校から145名の参加があった。(バス、昼食等は協力会から提供)

宮城県美術館に初めて訪れる生徒が多く、修復後世界初公開となったフェルメールの作品や17世紀オランダ美術をじっくり鑑賞していた。(写真8)



写真8 第1回(11月12日)の様子が翌日新聞報道された。

#### (ウ) 教育普及活動

5月1日に再開した創作室は、待ちかねた利用者も多く、大型連休明けには美術探検・美術館探検もスタートし、館内には子どもたちの歓声が響き、にぎわいが戻った。

また8月には、震災により中断となっていた佐藤時啓氏(東京芸術大学教授)による公開制作を再開、カメラの原型と言われるカメラオブスクラとリヤカーを組み合わせた「リヤカメ」の完成を受け、ボランティアの協力を得て、9月から12月にかけて乗車体験ワークショップとして運行したところ、参加者は2,000人を超える好評であった。(写真9)

さらに「フェルメールからのラブレター展」期間中の関連企画として、手作りのカメラオブスクラを使って、フェルメールの「柔らかな光」を追体験する場を設け、本物の絵と同じ構図で、フェルメール調の写真の撮影ができるコーナーを用意したところ、多くの来館者に楽しんでもらうことができた。(写真10)



写真9 ボランティアの協力により、土・日に運行したリヤカメは大盛況でした。



写真10 カメラオブスクラを使った写真撮影コーナーは、「柔らかな光」の追体験の場。